氏　　名	遠　山　義　人
学 位 の 種 類	博士（看護学）
報　告　番　号	甲第９５号
学 位 記 番 号	博第９３号
学位授与年月日	令和２年３月１７日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
論　文　題　目	若年成人期にがんと診断された男性が人生を生きぬいていく経験 The Experience of Men Surviving Cancer after Being Diagnosed in Young Adulthood
論 文 審 査 員	主査　遠　藤　公　久 副査　守　田　美奈子（正研究指導教員） 副査　川　名　る　り（副研究指導教員） 副査　鷹　野　朋　実 副査　吉　田　みつ子

論文審査の結果の要旨

日本においてがん患者に対する支援体制が整備されつつあるものの、若年成人期（18～29 歳）のがん患者に対する支援は発展途上にある。本研究は、全がん患者の約 0.5%と非常に少ない若年成人期にがんに罹患した人々の中においても、とりわけ他者に支援を求めづらい傾向のある男性に着目し、彼らががんに罹患することよってどのような経験をしているのか、その後の生き方やあり方にどのような意味をもたらすのかについて、長期的な視点から明らかにした希少な研究である。

研究者は、研究参加者として協力を得た男性 6 名（20 代にがんと診断され、その後 9～25 年経過）との間に研究期間を通して信頼関係を築き、一人につき 3 回のインタビューを丁寧に行った。研究参加者らの恋愛や結婚、子供をもつことや他者との関係性など、非常にセンシティティブな世代特有の体験や、男性としての自己の在り様に葛藤しながら生きてきた体験など、当事者が語りにくさを感じる可能性のある語りを聴くことができており、この点は高く評価できる。

本研究の結果においては、一貫して若年成人期にがんに罹患した男性の当事者の視点からの体験が描かれており、自己を脅かされるような感覚を体験し、その揺らぎから自己を守るために病人らしくないふるまいをしてがんと距離をとるようにあらがっていること、その中で男性自身が症状を自分でなんとか調整できる感覚をもつことや身体を通した回復感を感じることができる感覚が回復への意欲を高めることが明らかになった。この点は、これまで臨床実践の中で模索されてきた若年成人期の男性がん患者の理解を深め、ケアの糸口を示すものと評価できる。また、若年成人期の男性が、親や周囲への依存から自立へと向かう時期にがんに罹患することによって、親への罪悪感、結婚や家族を持つことに対する役割が果たせるだろうかという苦悩、その苦悩の中においても自己の在り方を模索し、がん患者としてだけではない生き方を切り拓こうとする姿がリアルに記述されている。

これまでは、がんに罹患した人々ががんサバイバーとしての自己を生きることががんを受け入れ生きる一つのモデルとして示されてきたが、本研究によって、彼らががん患者という一面的な自己に囚われることなく、未来を切り拓き、自分らしくあり続けようと生きる姿が明らかにされたことは、がんサバイバーに関する研究および患者支援にもたらす意義は大きいと評価できる。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。